戦争ドラマスペシャル　石井忠雄作 **「ある兵士の記録」**

＜前編＞ **「命、奪わざれ」**

フランク佐藤　（ナレーション） わたしの名はフランク佐藤。日系2世で、日本の方々への宣教師です。今年もまた8月が巡ってきました。日本中を焦土と化し、東南アジアの人々にいえ難い傷跡を残した太平洋戦争の記憶も、年月とともに風化してきたようですが、わたしには、決して忘れられない一つの出来事があります。戦争を知らない方々に、あの事実を知っていただきたいと思い、ペンを執りました。

(音楽)　(重苦しい感じ)

ナレーション　それは、日本がポツダム宣言を受け入れ、敗戦が決まって3か月たった、1945年、昭和20年11月のことでした。当時、弁護士をしていたわたしは、フィリピンのマニラで、旧日本軍の B 級戦犯を裁く軍事裁判で、日本人の陸軍二等兵今井真理(まこと)の弁護を引き受けることになりました。今井は、戦争中アメリカ兵の捕虜を殺した容疑で裁判にかけられていたのです。

裁判の焦点は、今井二等兵の行為が上官の命令によって行われたのかどうかということでした。それを立証することは、被告の刑の判決を大きく左右するのです。折しも法廷では、彼の直属上官である分隊長、太田陽介軍曹の尋問が行われていました。

エドワード検事　太田軍曹、あなたは、ジュネーブ協定で捕虜の生命を守る義務があることを知っていますか？

太田軍曹　いいえ… はい、知っています。

エドワード検事　それなら、なぜあなたの部下は捕虜を殺したのですか？

太田軍曹　さあ、わたしには分かりません。きっと我々日本兵を守るために自発的にやったのではないですか。

エドワード検事　あなたが命令したのではないのですか？

太田軍曹　とんでもない。あれは、今井が自分で勝手にやったのです。

ナレーション　太田軍曹の言ったことは、真実の一部をしか突いていませんでした。確かにアメリカ兵を殺したのは今井二等兵の意志でした。しかし、彼をその殺人に駆り立てた背景には、当時、多くの下級兵士が体験した次のような事実があったのです。

(音楽)　(暗い感じ。回想)

太田軍曹　おい、これから貴様らに、日本軍人としての根性を入れてやる。ここに敵のスパイがいる。現地人だ。こんなやつを野放しにすれば、我々の動静が敵に漏れてしまう。こんなやつは始末するに限る。そこで、貴様らに銃剣の訓練をさせてやる。目標はこの生きているフィリピン人だ。そうだな、今井、お前が最初にやって

みろ。

今井二等兵　……

太田軍曹　今井！　聞こえんのか。お前だ。お前がやるんだ。

今井二等兵　……

太田軍曹　貴様！　おれの言うことが聞けんのか。上官の命令は、天皇陛下の命令だぞ。そんなことで戦争に勝てるか！　(ビンタを張る)やれ！　やるんだ！

ナレーション　その時、銃床で体中を殴られた今井二等兵は、結局上官の命令によって、捕虜を殺害したのです。リンチでフラフラになっていた今井二等兵は、一突きで捕虜を殺せず、のた打ち回って苦しむ捕虜を何回も突き刺したのでした。それは、今井二等兵が犯した生涯で初めての殺人でした。

(再び軍事法廷)

エドワード検事　今井二等兵、あなたは、だれの命令でアメリカ兵捕虜を殺したのですか？

今井二等兵　いいえ、だれの命令でもありません。わたし自身がやりました。

エドワード検事　あなたは、ジュネーブ協定で、捕虜を殺してはいけないことを知らなかったのですか？

今井二等兵　知っています。

エドワード検事　それでは、知っていてなぜ殺したのですか？

今井二等兵　そんなことどうでもいいじゃないか！　殺したいから殺したんだ。それのどこが悪い？　悪かったらおれを死刑にすればいいんだ。戦争なんて殺し合いだ。殺すか、殺されるかだ。

ナレーション　今井二等兵は、それから貝のように口をつぐんでしまい、もう何を聞かれても答えませんでした。

その夜のことでした。

フランク佐藤　今井さん、今日、あなたは自分にとってとても不利な発言をしたんですよ。どうしたのですか？　僕が言ったように、「自分は上官の命令に従った」となぜ言わなかったのですか？

今井二等兵　弁護士さん。もういいんです。わたしは、自分で自分が分からなくなってしまっているんです。アメリカ兵の捕虜を殺したのは、確かに自分の意志です。憎かったからです。

フランク佐藤　どうしてです？

今井二等兵　わたしには、同じ部隊に武田という同郷の友人がいました。幼なじみで、大の仲良しでした。わたしをいつも励まし、助けてくれました。彼の分隊が、ある時、米軍の部隊と遭遇し、戦闘になりました。わたしの分隊は近くにいて、すぐ駆けつけたのですが、すでに彼の分隊は全滅して、アメリカ兵が現場の点検をしていました。でも武田は、ただ一人生き残って、まだかすかに息をしていたのです。それを、アメリカ兵は、面白半分に少し離れた所から、ピストルでねらい撃ちをし、

殺してしまいました。それを見たわたしは、初めて腹の底から憎しみが込み上げてきました。「こうなったら、おれも殺してやる。１人殺そうと、２人殺そうと同じだ。」アメリカ兵捕虜を任された時、わたしは武田の苦しみにゆがんだ顔を思い浮かべました。気がついたら、わたしは夢中でアメリカ人捕虜を突き刺していたのです。

ナレーション　翌日の法廷は、彼を弁護する立場からの、わたしの反対尋問で始まりました。彼の口から、昨夜、真実を聞かされたわたしの心中は複雑でした。

フランク佐藤　今井二等兵、あなたは以前、フィリピン人の捕虜を殺害したことがありますね？

今井二等兵　はい。

フランク佐藤　その時は、どんな気持ちでしたか？

今井二等兵　わたしは、集団の戦闘で以前にも敵を撃ち殺したことはあったかもしれませんが、目前にいる人を殺したことはありませんでしたから、とても恐ろしかったです。何しろ、自分と同じ生きている人間の命を奪うのですから。そんなことできないと思いました。

フランク佐藤　それではなぜ殺したのですか？

今井二等兵　……

フランク佐藤　黙っていては分かりません。あなたは、だれかに命令されたのではありませんか？　例えば、あなたの直属の上官である太田軍曹に。あなたどうしてかばうのですか？　真実を語らないのですか？

エドワード検事　異議あり。弁護人は推測で物を言っている。上官の命令であっても、悪いことは拒否すべきだ。それができなかったのなら、直接手を下した本人が責任を負うべきです。

フランク佐藤　裁判長、これは大事なところなのです。彼は、一度命令で捕虜を殺しました。それ以降、彼にとっては、それが“無言の命令”となりました。また、あの最初の殺人は、彼の良心をマヒさせてしまったのです。最初の時、彼は殺すのをちゅうちょしましたが、彼の立場で、その命令を拒むことは不可能でした。陸軍二等兵といえば、日本の軍隊では一番階級が低いのです。日本では、上官の命令は天皇陛下の命令だと言われています。たとえ軍曹の命令でも、それは天皇の命令で、絶対服従なのです。それでもためらった彼は、命令に従わないといって、太田軍曹からリンチを受け、処刑を強要されたのです。

裁判長　本当ですか、今井二等兵？

今井二等兵　いや、そんなことはありません。

フランク佐藤　今井さん！　裁判長、被告人は真実を語っていません。

今井二等兵　ちょっと待ってください。どうかわたしを死刑にしてください。わたしは悪い人間なのです。処刑されて当然なのです！

ナレーション　そう言って、今井二等兵は、またわたしの知らなかった一つの新しい事実を語

り始めました。

(音楽)　(暗い感じ)

今井ナレーション　わたしは、あのアメリカ兵捕虜を殺したのち、追撃してくる米軍から逃れようと、残り少ない分隊で、フィリピンのジャングルを奥へ奥へと退却していました。すると、小さな原住民の部落のある所に出たのです。ほとんど飲まず食わずだった我々は、彼らを見ると、すぐ銃剣を突きつけて、何か食べるものを出すように命じました。しかし、日本軍の残虐な行為の数々を聞き及んでいたのでしょうか、彼らは目にはっきりと敵意をあらわにして、それを拒みました。我々は、その中の長老とおぼしき老人を何とか脅して供出させようとして、たたいたり、小突いたりしても、頑として言うことを聞きません。わたしは、怒りと、追って来る米軍に攻撃されはしないかとの恐怖に我を忘れ、見せしめに、その老人に銃剣を突き立てようとしました。その時です。

フィリピン女性　待って、待ってください！

今井二等兵　な、何だ、貴様は！　そこをどけ！

今井ナレーション　それは、若いフィリピンの女性でした。彼女はその老人の前に立ちはだかって、たどたどしい日本語で必死に頼みました。

フィリピン女性　この人は、わたしのおじいさんです。お願いです。殺さないでください。食べ物が欲しければ、少しですけど、わたしの家のもの、あげます。逃げ道も教えます。だから、おじいさん助けて、殺さないで！

今井二等兵　うるさい！　少しばかりの食いもんじゃどうにもならん。こいつを殺して、貴様らの蓄えを全部出させるんだ。邪魔するな！

フィリピン女性　ダメ、人を殺すことダメ、いけない！　お願い……キャー！

今井ナレーション　わたしは、老人の前に、転がるように飛び出したその女性を、力任せに突き刺してしまったのです。彼女は、苦しい息の下から、一冊の書物を取り出し、わたしに差し出しました。それを見たわたしはハッとしました。それは日本語の聖書でした。

フィリピン女性　兵隊さん、これ、読んで。イエス様は、赦(ゆる)してくれます。

今井二等兵　実は、わたしの両親はクリスチャンで、わたしも小さいころに洗礼を受け、中学生のころまでは、礼拝にも出ていたのです。聖書には、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と書いてあります。そして「殺してはならない」と教えています。わたしの心の中には、その教えがどこかに残っていました。でも、一度人を殺してしまい、殺さなければ殺されるという状況の中では、もうその教えを守ることは無理でした。わたしは、「戦争なんだ。しょうがないんだ」と自分の良心に言い聞かせながら、必死で生き延びてきました。でも、わたしは、同じ神を信じるクリスチャンを、この手で殺してしまったのです。わたしはその時、初めて思い知らされました。「人の命は、どんなことがあっても奪ってはならない、賭け外のな

いものだ」と。だが遅すぎました。わたしは生きている資格がない。お願いだ。わたしを死刑にしてくれ！(泣き崩れる)

ナレーション　そう言って男泣きに泣き崩れた今井二等兵を、わたしは言葉を失ったまま、ぼう然と見つめていました。

＜後編＞**「裁かるべきもの」**

ナレーション　その夜のことでした。わたしは、今井二等兵を面会所に呼んで、彼と話し合いの時を持ちました。最終弁論を翌日に控え、彼のことを、同じクリスチャンとしても、より深く知りたいと思ったのです。

フランク佐藤　今井さん。あなたはクリスチャンでしたか。わたしもそうなのですよ。わたしの父は日本人の牧師で、母はアメリカ人です。ところで、あなたのご両親は、あなたが戦争に行くことについて何も言いませんでしたか？　わたしは母から反対されましたが。

今井二等兵　そうですか。わたしも同じです。母は泣いて止めました。父も厳しく止めました。

フランク佐藤　ではどうして兵隊になったのですか？

今井二等兵　その前に、あなたはどうしてですか？

フランク佐藤　わたしには2つの理由があります。1つは、アメリカにおける日本人の立場です。在米邦人は、アメリカに敵対していると思われていましたから、そうでないということを示す必要がありました。もう1つは、正義のためです。世界の平和と正義を守るためには、次々と侵略の手を伸ばす日本と戦わねばならなかったのです。

今井二等兵　世界の平和ですか。その平和を守る兵隊が、ひん死の重傷を負って苦しんでいる、わたしの親友を面白半分に殺すのですか？

フランク佐藤　確かに、戦争は狂気です。しかし、平和を侵すものは排除しなければならない。ここにジレンマがあるのです。ですが、人間は、神の前似には徹底して自己中心の罪びとですから、もしかして「平和と正義を守る」というのは、表向きのスローガンかもしれません。わたしの町には、合衆国の高官の子供が徴兵を逃れたといううわさがあります。一方では、貧しい移民の子供が危険な戦場に回されているということも聞きました。

今井二等兵　それはわたしの国にもあります。金持ちの息子は兵隊に取られない。そんなことがあってもいいんでしょうか。実は、わたしには兄が1人いました。わたしの父は役場の小使いをしていました。皆に少しばかりバカにされていましたが、神様を信じてまじめに働いていたのです。ある日、兄のところに召集令状が来ました。兄は体が弱く、とても兵隊にはなれそうもなかったのにです。

(音楽)　(回想)

隣人 A　ねえねえ、今井さんとこの道夫さんに、赤紙が来たんだってさ。

隣人 B　へえ、あの弱い道ちゃんに？　もしかしたら、町長さんとこの勇ちゃんの身代わ

りじゃないの？

隣人 A　そうかもね。町長さん、随分お金使って、軍のお偉方に運動していたらしいわよ。

今井ナレーション　その兄が「僕はクリスチャンだから銃は持たない。戦争に行かない」と言って徴兵拒否をしたのです。すると、すぐさま憲兵が血相を変えて飛んできました。

憲兵　今井道夫は貴様か。徴兵を拒否するとは本当か？

道夫　はい。わたしは戦争に反対です。人を殺すこともしたくありません。

憲兵　何？　貴様、それでも日本人か！　今日本は、大東亜共栄圏を確立するために、必死に戦っているのだ。このままだと、アジアは鬼畜米英の奴隷となってしまう。「八紘一宇」、アジアを欧米の帝国主義とアカの手から解放して自由にするのは、我ら日本人の使命だ。賢くも大元帥陛下の大み心を無にし、従わない者は、日本臣民ではない。貴様はヤソだそうだが、我々日本人の神は、天皇陛下だ。それに従えないようなやつは、真っ先に日本から出ていけ。

今井ナレーション　兄は、そのまま、憲兵隊に連れていかれ、帰ってきた時は、息も絶え絶えで、体中が青黒く腫(は)れ上がり、２日後にひっそりと息を引き取りました。それからというものは、隣組や近所の人からも冷たい目で見られ、村八分同然になりました。

隣人 A　あんた、あの家は近づかないほうがいいわよ。非国民の仲間と間違えられるからさ。

隣人 B　そうね。やあね、この戦局の厳しいときに、皆、男手を戦地に取られているときに、自分だけ勝手ね。

今井ナレーション　親せきからも相手にされなくなりました。父は役場を辞めさせられ、やむなく遠いところまで行商に出かけましたが、留守宅には石が投げ込まれました。そんな時、当等わたしにも赤紙が来たのです。

（音楽）　（重苦しい感じ。回想）

父　真理、お前どうする？　お父さんは、どんなに苦しくとも戦争は反対だ。兵隊には行くな。

母　わたしも、お前を戦場に送り、人を殺させたくない。どんなことがあっても、聖書の教えに背くわけにはいかないんだから。大丈夫、わたしたちのことはきっと神様が守ってくださるから。

真理　やめてくれよ。こんな生活、もうたくさんだ。おれの友達もみんな出征するんだ。日本の国を守るためだ。他人に任せて、自分だけのうのうとしているのは、身勝手だ。おれは行くよ、父さん。たとえ生きて帰れなくても、祖国日本を守るために、この身をささげるんだ。

父　真理。戦争なんて、そんなにきれいごとで済むものではないんだ。いろいろ大義名分はあるだろう。しかし、戦争は人間の罪の結果なんだよ。決して神様はお喜びにならないぞ。

真理　何が神様だよ。父さんがそんなこと言っているから、兄貴は死んでしまったんだ。父さんの人殺し。

今井ナレーション　わたしは、両親の止めるのを振り切るように、結局軍隊に入り、満州から南方に送られてきたのです。わたしは、聖書の教えも神様のことも忘れるようにし、できるだけ他の日本人と同じように振る舞いました。そしてこのフィリピンで、あの忌まわしい事件を起こしたのです。

フランク佐藤　そうでしたか。で、あなたは今もまだ、神様を否定しているのですか？

今井　はい。一度、神様を信じたあとで、こんな大罪を犯したものを、神様は赦してくださるはずはありません。

フランク佐藤　今井さん。あなたは、フィリピンの女の人から日本語の聖書をもらったと言ってましたね。その中のルカ伝15:11～124節を読んでみてください。神様は、大罪を犯しても、あなたが心から悔い改めて、神様のもとに帰ってくるのを待っておられるのです。

ナレーション　わたしは、その夜、彼がその聖書を読んでくれたか、その結果、彼の心にどういう変化が起こったか、確かめるチャンスはありませんでした。ただ神様が、直接に彼の心に働いてくださるように、心を注ぎ出して祈るのみでした。

翌日、いよいよ彼への判決が下されることになりました。法廷で彼を見たわたしは、ハッとしました。目を赤く泣きはらしてはいましたが、その顔は、何とも言えない、そう、共に主を信ずる者のみが理解できる、平安な輝きに満ちていたのです。わたしは、心の中で主に感謝をささげながら、彼と共に法廷に臨みました。

（効果音）　（法廷のガヤ）

裁判長　静粛に。これから今井真理二等兵の、アメリカ兵捕虜殺害に対する判決を言い渡します。被告人、今井真理二等兵を死刑に処す。また、太田軍曹は懲役…（FO）

ナレーション　わたしは、罪の事実をありのままに認めた今井二等兵の刑が軽減されることを信じていたので、この判決はショックでした。やはり、「上官の命令は天皇の絶対命令」という日本の論理は、裁判長に理解してもらえませんでした。たとえ理解されていたとしても、自らの意志でアメリカ兵を殺害した事実は、法の前にいかんともしがたかったのです。今井二等兵は、それから間もなく処刑されました。彼が、処刑前夜、獄中から最後に書いた手紙がわたしに届いたのは、それから間もなくでした。

今井　（手紙の声）フランクさん。本当にいろいろとお世話になりました。あるいは死刑だけは免れるかと思ったこともありましたが、今はこれでよかったと思っています。神様と罪もなき人々に対し、このような大罪を犯したのですから、この身で償うのは当然だからです。

我が罪は死もて償うに悔いなきを
絶えて戦のなき世をぞ祈る

しかしあの晩、あなたとの話のあと、わたしは一晩中かかって神様と語りました。教えていただいたルカの 15 章だけでなく、引き付けられるように読み進んだわたしは、ルカ 23 章 34 節のみ言葉にくぎ付けになりました。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか、自分で分からないのです。」わたしは、まるで雷に打たれたように、それが自分のための祈りだと感じたのです。そして、こんな者のためにも命を捨ててくださった、イエス様の十字架の愛と赦しを確信できたことは、わたしにとって何ものにも代え難い喜びでした。

敵のため十字架に祈りしキリストよ
我がためにこそ祈りたまいしか
とがもなき人を殺(あや)めし罪ゆえに
十字架のほかは赦されざりき

今、わたしの心は平安です。たとえこの身は日本に帰れなくても、わたしは天国で父や母、そして迫害で死んだ兄に会うことができるのですから。そして天国では、あのフィリピンの女性や、アメリカ兵一人一人に、心から赦しを請いたいと思います。

赦されてみ国に帰るうれしさよ
父母　兄ら共に主をば拝せん

それにしても、戦争というものは恐ろしく、むなしいものです。「国のため、平和のため」という大義名分の下に、人は狂ったように互いに憎み、殺し合うのです。わたしはあなたにお話ししなかったことが、もう1つあります。わたしも、本当は兄のように徴兵拒否をしたかったのです。しかし、兄のことで父母が味わった迫害や苦しみを見ていると、我慢できませんでした。そして、お国のためということで、自分を納得させ、兵営に入りました。初めてフィリピン人の捕虜を刺し殺した時わたしは怖さと罪の意識に震えました。しかし、人間は恐ろしいもので、一度人を殺すと、あとは平気になるのです。そして、次から次へと戦争に名を借りて殺人を繰り返しました。そこには、もはや国や平和のためなどの大義名分はなく、あるのは強者の論理だけです。捕虜殺害を命令した上官が罰を受けず、、実行した下級兵士がその責任を問われる不合理も、戦争のなせる業でしょう。しかし、真に裁かるべきは、己の欲望を満たすためには、進んで人の命も奪おうとする、人間の根源的なエゴイズムの罪です。これを真に解決するには、イエス様の示された十字架の愛を知り、一人一人が悔い改めるほかはありません。人の罪がもたらす憎しみと敵意は、あの神のみ子の和解の十字架以外には決して取り除くことはできないのです。

フランクさん。あなたにお会いできて本当によかったと思います。もし日本に行く

ことがあったら、日本の人々にぜひこのことを知らせてください。最後に、文中の数首は、歌など作ったことのないわたしが、辞世のつもりで書き留めたものです。もし国の両親に送っていただけたら、感謝です。では、み国で会える費を望みつつ。　今井真理

ナレーション　わたしは間もなく、宣教師として日本を訪れ、それからの40年、ひたすら十字架の福音を宣(の)べ伝えてきました。8月が巡り来るたびに、わたしは、もはや茶色に変色し、ボロボロになった彼の手紙を取り出しては、平和への決意を新たにするのです。

＜完＞